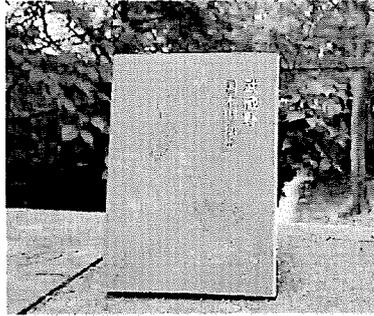


「雑木林の美」に違和感

文人の 武蔵野

「『山林に自由存す』と歌った明治の詩人の句が思い出された。しかし熱帯の山林を独り彷徨したことがある彼は、自由がいかに怖ろしいものであるかを知っている。明治の詩人にとって瞑想を伴奏する檜櫓の快い緑の諧調も、今彼は薪の材料としか映らないのである。人間の手を加え

大岡昇平 ⑩



国木田独歩の大作「武蔵野」(武蔵野市で)

ずしてこれほど檜ばかり密生するとは考えられない。」大岡昇平の「武蔵野夫人」

の二節です。主人公の「勉」が、「『山林に自由存す』と歌った明治の詩人」である国木田独歩の自然観に対して二つの違和感を表明している箇所です。違和感の一つは、前回の記事で述べたような山林の「自由」をめぐる感性に根ざすものです。もう一つは、武蔵野の自然史に対する歴史認識とかわるものです。

独歩は、今日に至るまで、「雑木林の美の発見者」だとされています。明治期に独歩が「武蔵野」を発表すると、武蔵野は自然豊かな土地であり、その中心には雑木林があるというイメージが広がりました。しかし、独歩の友人でもあった柳田国男が指摘したように、いわゆる武蔵野の林は、「近世作」であり「薪の材料」を確保するために江戸時代に植生されて出来上がったものでした。武蔵野という土地に豊かな林があったわけではなく、自然に「檜ばかり密生」したのでなく、都市部の人間の生活のために制作されたものでした。

ところが、「檜櫓の快い緑の諧調」と「瞑想」との魔術的な組み合わせは、独歩以前の歴史の起原を忘却させました。独歩の筆致により、あたかも人工林が自然林であるかのような共通感覚が生成されたのです。柳田が指摘し、さらに昭和期に大岡が「武蔵野夫人」で勉に語らせてもなお、近代武蔵野の自然史をめぐる歴史認識は容易に更新されませんでした。とはいっても、湧水がつくった窪地である「はけ」という地形を描き込んだ「武蔵野夫人」は、古代武蔵野から近世までの武蔵野に目を向けさせ、武蔵野の自然が林だけではないことを示したとは言えそうです。

(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)



過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。